

立命電友会

学生時代の思い出と

電友との出会い

電気設備〈自家用電気工作物〉の知識 著者
樋口暉之
(昭和三十五年卒)



前会報で拙著のご紹介をいただきました。荒木会長様よりお話があり、書かせていただくことになりました。立命電友会の皆様宜しく願います。

今年は立命電友会第五回大会の年、まことに喜ばしく存じます。さて私が電気に興味を持ったのはラジオでした。中学生の頃、少しずつお金を貯め、真空管、抵抗コンデンサ、コイル等の部品を通

信販売で購入し組立てるものでした。組立てても聞こえない場合、回路点検用のテスターを借りるのに苦労したことを覚えています。NHKラジオ』ときめきインタビュー』でお聞きした東北大学の大学院情報科学研究科教授の堀口進先生もラジオからとのこと。ラジオに興味を持ち、電気にかわる仕事にいた方も少なからずおられるのではないのでしょうか。

電気工学を専攻したのは興味だけではなくこれからは『電気』があらゆる分野に関係するので「潰し」が利く、とのアドバイスもあったように覚えていいます。

大学時代は生活が大変だったので生活費が安くつく理工学部の学生が多い衣笠寮に入っていました。図面を書く製図器などは京都工芸繊維大学繊維学部近くの質屋から

必要な時のみ借りていました。勉強よりアルバイトが主な生活でした。そんな私でしたが寮にいた優秀な電気専攻の先輩や同期生に囲まれていたお蔭でなんとか卒業することができました。そうはいってもアルバイトはできるだけ講義に影響がないよう校内の食堂で昼食事と夜食事の多忙な時間帯のみにしていました。余ったものが食べられたので食費の出費が少なく助かりました。当時は真空管式の白黒テレビが実用化されていまだが家庭への普及には至っていない時代でした。映画が大変盛んで、大泉には殆どの映画の製作会社があり、しかも寮からも近くであったのでよくアルバイトに行きました。電気関係では家庭の電力取引用電力量計の修理にたずさわりました。寮生活の間もない頃、五右衛門風呂を沸かす当番で給水を確認したのち石炭に火を付け、湯加減を見に覗いたところ排水栓のパッキンの不具合で水は漏れてなくなり風呂の底は真っ赤に焼けていたので風呂が冷めた後に炊きなおすという失敗をし、寮生には迷惑をかけました。がとがめられもせずかえって心配をしてくれる先輩や同期生の集団で運営する自治寮でした。一回生の夏休み先輩三、同期生一、の計五人でスピードメーターの壊れたポンコツ外車をリースして先輩の運転で六甲山へドライブに行きました。山腹途中でエンジンがオーバーヒートしたため小川を捜し帽子に水を汲み冷やしながら

ら登りました。下りはブレーキが焼けたためサイドブレーキを利用して麓までたどりつきガソリンスタンドの水道水で冷やしました。京都に帰る途中では阪神の路面電車から降りてきた方と接触事故を起こし警察署で調べられるという散々なドライブでしたが被害者の方が我々を大学生だと知ると前途ある若者であるからと、我々を擁護していただいたことがとても嬉しかったことを覚えていいます。寮歌の終わりに「ああ我が友よ我が丘よ いつかえりみん想いでぞ」とあります。

私にとって寮における団体生活は貴重なものでした。卒業後はすこし会社勤めをした後、工業の発展には欠かせない中堅技術者の養成が叫ばれるようになり大阪市が東洋一の工業高校を目指していた学校作りに参加することになりました。開校は既設の夜間定時制を借用しながら校舎の建設と並行して実験・実習器具の選定、実験・実習の方法（指導書作り）の研究に取組む過程でようやく電気の基礎が身についたと思えるようになりました。この学校の放送部員には同期の電友会副会長がラジオ大阪に勤めていたので放送のあり方についての話をお願いしました。

三十代半ばで転校した岡山では電気工事士国家試験を手伝うように要請され試験委員や試験会場校のお世話を致しました。その会合で中国電気保安協会岡山支部長の

先輩と出会いました。この協会に就職したい教え子が緊張すると話すことが出来ないことを先輩に話したところ本部の面接委員に連絡をして下さり、無事合格しました。二十年程前に電気工事士法が改正され高電圧の電気設備の工事や管理が出来る第一種電気工事士制度に伴う資格講習を全日本電気工業事業連合会から推薦され講師を務めその講習終了慰労会では後輩の講師と会いました。私の定年後、彼からビール缶を造る工場（工程の電気系統）のメンテナンスについて従業員教育の話がありお受けしました。後輩の定年後には専門学校で一緒に教えていましたが後に彼は電気主任技術者の資格を活かして六万ボルト受電の岡山大学電気設備管理の仕事に移りました。また岡山県の情報系の産学協議会で産の世話役のベンチャー企業社長との出会いもありました。

最後に電友であることを知らずにお会いしていた出合いを報告します。岡山理科大学准教授をしている教え子の結婚披露宴の会場、岡山後楽園鶴鳴館での隣席の南原英生教授が後に立命の電友であることを立命電友会報で知ったことです。お互いに同窓生であることを知らずに出会っているかも知れませんね。

立命電友の皆様のご健勝とご活躍をご祈念申し上げます。

立命電友の皆様のご健勝とご活躍をご祈念申し上げます。

立命電友会活動を振り返って

立命電友会会計監事(会計監査) 前田稔夫 (昭和三十年卒)

昨年十月下旬、立命電友会事務局長代行直々に会報三十一号の原稿執筆依頼があり、記事内容をいろいろと考えた末、立命電友会創立以来役員の一員として今日に至ったことでもあるので、これまでの立命電友会活動を私なりに見聞きし感じてきたことを記憶をたどって綴ってみることにした。

立命電友会は今年で創立から十六年目を迎え、平成二十年六月二十一日(土)には第五回定例総会が開催されることが決定している。この間、得田益男氏(昭二十年卒)、池田育弘氏(昭三十二年卒)、加納久雄氏(昭三十年卒)そして荒木敏(昭三十四年卒)の四氏が立命電友会会長に就任された。初代会長の得田氏には立命電友会発足の準備委員会委員長として各種の議論に参画していただいた。また、立命電友会設立とほぼ同じ時期に理工学部BKC拡充移転事業が推進され、学部と各学科同窓会が一体となって取り組んだ「衣笠学舎さよならの集い」には立命電友会代表として精力的に行動していただいた。とりわけ立命

電友会発足当初からの会則で決められた定常的な課題でもある卒業生からの終身会費の徴収と年二回の会報の発行が安定的に実行に移せるかどうかが会長にとっては当面の心配事ではなかったろうか。終身会費は初年こそは多くの既卒生と年次卒業生からの納入もあって近年への期待感も膨らんだが、期待に反して既卒生からの納入が年々急激に減少し年次卒業生からの納入に頼らざるを得なくなった。しかも年次卒業生からの会費徴収は卒業式後の学科別卒業証書授与式の合間を利用して個々に主旨説明と納入方を依頼するという事務局側にとっては納入率もさほど上

がらず辛い作業であった。したがって、後年、立命電友会活動に要する年間予算も緊縮を指向せざるを得なくなり、財政赤字を避けるため、ある時期からは年二回の会報発行も奇数号は卒業生全員に偶数号は終身会費納入者のみとするこ

友大会の開催そして全学的には社会的ネットワークの構築の重要性が謳われる中、他学部同窓会組織との対応関係からしても、以前からあった理工学部同窓会組織の結成の機運が高まり、各学科同窓会の代表による協議会が設けられた。そこでは種々議論が重ねられ紆余曲折を経て理工学部同窓会連絡協議会が設立されることになった。このことは、全学の校友会活動の視点からしても、学部レベルとして、形式的にも理工学部の窓口が誕生したことになる。そしてこれを機に、同窓会会費(立命電友会(終身会費))は大学の窓口で父兄の学費納入期に併せて納入してもらうことが可能となり、後年は会費納入率も格段に向上して年次予算編成とその執行は幾分か余裕を持って取り組むことができたのではないかと思われる。また、漸く軌道に乗った事務局体制の強化の一環として、事務を担ってもら

専任の人を学科事務室に設けられた事務局に配置することとなった。三代会長加納氏になって、立命電友会の体制づくりも一段落した中で活動を全国的に展開するため

岡市を中心として活躍している卒業生に支部設立の根回しをはたらきかけ、一定の見通しを付けた段階で当地に設立準備会を発足させて、会長、副会長そして事務局長等々主要役員が出向いて協議を重ね「立命電友九州・沖繩支部」を設立することとなった。設立総会は平成十三年六月九日に福岡ガーデンパレスホテルで、九州各地から多数の卒業生そして会長以下立命電友会役員多数が参加され盛大に開催された。この支部設立に関しては、立命電友会独自として外部へ打って出る最初の事業であり、会長、副会長、事務局長等主要役員

のこれにかける熱意は並々ならぬものがあつたと聞き及ぶ。一方、ほぼ時を同じくして立命電友会創立十周年記念祝賀会開催に関する企画準備会が発足し、役員と各卒業年次から選出された代表によって種々議論が交わされ、平成十四年十月十九日、京都全日空ホテルで開催されることとなった。この祝賀会は学園関係者でもある著名人の講演と校友でもある有名人のゲスト出演によって大盛會裏に終了した。なお、参加者数は当初の予想を上回り、会員の立命電友会活動に関する評価と期待が如何に大きかったかを示すものでもあつた。

賀会の成功をうけて、立命電友会活動の更なる活性化を指向するために、同窓会の開催を促進するための方策として、開催を計画しているクラスやグループにたいしては、事務局において名簿の作成と整理、案内状の印刷と発送等々の作業を積極的に援助することとした。そこで、この方策を遂行するにあたっては国の個人情報保護法との関連で立命電友会名簿の取扱方等に関する規則を定めておく必要性に駆られ、会長と事務局長そして若干名の役員が加わったワーキンググループで規則に関する議論が鋭意交わされた。そこでは規則作成にあたって、まず個人情報保護に関する基本方針が練られ、次にそれに基づく個人情報保護規則の策定と言う段階を経て「立命電友会個人情報保護基本方針」、「立命電友会個人情報保護規則」が役員会において承認、制定、施行の運びとなった。

以上四人の会長時代の出来事の一部を述べさせていただいたが、記事の内容には少し時間差や誇張した部分もなきにしもあらず、また直接事に当たった役員の方々とニュアンスの違いがあるかと思われまますがその点は何卒ご容赦下さい。今後とも立命電友会が会員の身近な存在として発展を遂げてゆくことを心より願っております。

立命館大学に学んだこと

……我が人生の恩人……

星野 章

(昭和三十八年卒)

毎年日立金属和彊館で開催される関東立電会には楽しみに参加していますが、昨年のスピーチで学生時代に私のやった仕事の話をしゃべってしまったことで立命電友会の高山先生から回顧文を書くように云われて、ツイ受けてしまいました。本会報を執筆される諸先生とは異なり電気工学から少し脱線しますが、こんな学生もいたのか……?とご笑読願います。

(1) 慶本中尉

私の生まれは広島県竹原市、海の美しい海岸の町ですが軍港(呉市)に近く、山裾に大きな防空壕(洞穴)が出来て(海軍研究所)、我が家には技術の慶本中尉というご夫妻が同居されました。もの凄いや量の図書、電気材料が運び込まれ、和室の部屋には鍵が付けられました。私が小学一年生の時で何度も家のヒューズがとぶので気になっても近よることは出来ませんでした。

ところが三年生の八月、広島原爆投下と終戦になり、後で聞いたところ慶本中尉は魚雷の無線誘導装置の研究中であつたとか、終戦と同時に真夏の庭で書類の焼却が始まり、(慶本中尉)は平服に

戻ってからは隠し残したパーツで無線機作りに熱中されました。私は不良コンデンサーを買って中のアルミ箔で遊んでいましたが、トランス作りやハンダ付作業を見るのが楽しくなり、ついに自分でも受信アンテナのコイルを巻いて鉱石ラジオを作ってヘッドフォンから松山放送局の音が聞こえた。この時の感激が十歳になった私の電気屋スタートでした。当時発行されていた雑誌(子供の科学)で毎月の工作記事に夢中になり、アマ無線への夢を膨らませました。

中学生になってからは音楽と音に興味を持ち、(慶本さん)からは熱心な指導を受けて、何も無い時代にボイスコイルを手巻きして薄革エッジのコーンスピーカーまで自作しました。(モノづくりの楽しさを自分の子供にも教えようとして失敗しましたが、四十歳近くになった次男がNHKのDIY工作室番組に出演しているのを見るとこれは少し親のDNA因子が伝わったかな?とニヤッとします)。

(2) 2A3

さて、米軍払い下げのジャンクパーツで遊んでいた高校一年の時、

金持ちの友人に電蓄(レコードプレーヤー付きの大型ラジオ)の製作を頼まれて、初めて新品の部品を買集めて今で云うアンプを組み立てましたがこの時に出会ったのが出力用三極真空管(2A3)です。完成後の試聴に買ってきたSPレコードの「第三の男」の音質の素晴らしかったこと。アン

トнкаラスの透明なクターの響きの記憶は今も忘れられない感激でした。今では高出力、高品質のアンプやスピーカーがいくらでもあります。先日久し振りに秋葉原を歩いているとオーディオ売り場にしっかりと(2A3)シングルアンプが現役で売られており(真空管は中国製の由)懐かし、ショパンのピアノをタンノイのスピーカーで聞かせて貰いましたが、五十五年前の感激には及びませんでした。しかし昔自分が選んだ製品(パーツ)がいつまでも評価されていることに内心満足感を味わいました。

(3) 立命館大学工学部学生部

(久保 幸雄先生)

高校卒業後事情あつて四年間道草をすることになりましたが、どうしても電気工学の夢が捨てきれず立命大に受験しました。立命館には末川総長がいらっしゃる。原爆直後の広島で中学高校時代を過ごした私は学友の被爆者や核兵器の悲惨な状況を眼のあたりに経験し、「きけ、わだつみの声」が私の大学選びの原点でした。更に貧乏学生にとつては(二部学生

の差別は無い)大学であると聞いて迷いはありませんでした。入学してまず飛び込んだのが学生部で、そこで(久保 幸雄先生)に出会い、最初からお世話になりました。私が京都で卒業まで生活ができた大恩人でもあります。当時私は身体が弱く、アルバイト疲れで大学は無理ではないかと悩んでいた時に、「京都大学医学部で研究助手を探しているので身体には楽だと思っから行って見ないか」と勧めて頂いたのが今から思うと私の人生最大の恩人のお言葉となりました。実はこの仕事の延長で卒業後の就職先も決まったのですから……。

(4) 小堀 富久夫先生

京大医学部の研究テーマは眼科教室で「心電図」や「脳波」と同様に光に反応して眼球視神経から発生する電位変化の波形を臨床検査に役立てようとする研究でした。主研究は当時医学部講師の(永田誠先生)で、この研究結果で眼科学的世界的な大先生になられました。検査設備は(ERG)の名称で今では眼科検査に不可欠の検査設備になっています。私の仕事は世界初めての手探り状態の開発作業で大変苦労しましたが、子供時代からのモノづくりの悪癖が役に立ったのか? 何とか大学卒業迄に目標達成することが出来ました。この仕事で一番の難関は生理的信号に混入するノイズの除去でした。数ヶ月も悩み続けた難問でありましたが、ある日小堀先生の二部授業中の雑談でAMPのノイズを低減する方法について職場

での経験者から多くの意見提案を聞かせて頂いたのは私にとって正に「目から鱗」の機会でした。翌日からAMP改造に色々取り組むうちに、網膜神経から発生する微小電流波形をクリーンに取り出すことが出来ました。残念ながらどの手法が効果的な対策であったか? については明確ではありませんが、私にはこのような機会を頂いた小堀先生に大変感謝しており、卒研迄お世話になりました。卒研テーマは今薄型TVで話題になっている(EL)関係の乏しい文献を調査した報告論文の提出で勘弁して貰いましたが先生からはELの発色が周波数をコントロールして変化出来る……と伺った記憶があります。お会い出来る機会にはそんな話をもう一度お聞かせ頂きたいと思っっています。

(5) 辻村・前田研

辻村先生からは卒業後に、会社の求人のお願いに伺って、後輩を紹介頂くなど現在迄もお世話になっています。今年六月の電友会には辻村・前田研に浦田研が合流されるとか楽しみに参加したいとおもっています。

最後に四年間の在学中に私の人生の一大転機となる恩人との出会いに恵まれた立命館大学と諸先生、電友会事務局の皆様には厚く感謝致します。

退職にあたって

山田 喬彦

電子システム系同窓の方々にはおなじみ頂いていないかと思えますので、まずは少々の自己紹介をさせていただきます。BKIC開設時にNNTを退職して情報学科に職を頂き、二〇〇四年度の電子情報デザイン学科開設時に電子システム系に移籍いたしました。ところが、はからずも本年退職することになり、ご挨拶させて頂く次第です。実は、大学側に規約の誤解があり、本年度になるまで「来年度の退職」という認識でことが進んでいました。しかし、本年になって人事関係のコンピュータが本年度退職者に私の名前を出力してきたため、急きょ本年度の退職となった次第です。私の誕生日が四月一日であったためのややこしい話です。

専門は通信網・通信システムです。企業では実用化部門に在籍し、基礎的な勉強が不足していたため、赴任後は教える立場で必死に勉強しました。このとき、学生時代に分からなかったことがすいすいと分かって驚いたものです。勉強って教えてもらうという受け身の姿勢ではだめだとつくづく感じました。退職時になって白状いたしますが、学生時代は登山などに多くの時間を割き、勉強は不足しておりました。このような状況で多くが我流です。授業テキストはすべて手作りでおこないました。学生時代に分からなかったことを

思い出しながら教育の工夫もしてました。学生時代にフリップボード回路を勉強したとき、反転する回路が組み合わさって、論理1をどう表すのか、なんて悩んだことを思い出して、情報学科の論理回路のテキストを作り直しました。すると実験を手伝う院生TA(Teaching Assistant)が「フリップボードってこんななんだっただ」と初めて理解したという風でした。手応えを感じたものです。また、電子情報デザイン学科の通信基礎回路実験では、通信関係の勉強は座学だけであったことを反省し、コンピュータのプログラミングのように自分で作成し、動作を実際に確認させたいと考え、FPGAを用いてプロトコル試験機を実現し、PCMや時分割多重化パケット転送用のHDLC、デジタル変復調が実験できるように行われていないらしく学会研究会で発表したところ、反響を得、良い評価を頂きました。研究面では、NNT研究所交換関係の部署で交換機の制御系の実用化を二十五年間行ってきました。学生時代には半導体デバイス関係の研究室に属していましたが、時は情報化の国家政策の時代、研究所には百五十人が配属され、そのうちの半分がコンピュータに関わる研究室という時代でした。交換機ソフトウエアの研究室にぶち込まれ、専

門が違うとがっかりしたものです。東大の入学試験が中止された学園紛争の年の卒業生。その時代の新入社員が、日本一と言われる研究所で「日本の技術なんて米国の物まねばかり」なんて生意気なことを言うものだから反体制者の烙印をばられ、実は昇進も遅れました。

転機は六年目、はみ出し人もアイデアを出せば認められる太っ腹な良き時代でした。提案が認められ、これに成功しました。(リカバリーさせてやろうという先輩の思いやりのおかげだと思いますが)その頃はコンピュータが高く、メモリは数多くあるものの、コンピュータ制御電子交換機は高くて商用になっていないという時代でした。そこで「部品高速化の進歩を性能向上だけでなく、システム

の経済化にも利用しよう」と提案して認められました。初任給五万円程度の時代に、「入社六年目の若造一人に研究試作費二千万円を出す」なんてことがあったのです。マイクログラム制御技術を使ってデータチャネル装置を多重制御する方式を考え、部品数を減らし、経済化を図りました。これをきっかけに電子交換機用コンピュータの経済化が達成され、コンピュータ制御の電子交換機が実際に日本でも使われるようになってきました。この成功によって主要な電子交換機の制御系開発を任せられるようになり、デジタル交換機になりました。デジタル交換機制御系の開発も任せられ、思いのままのマルチプロセスアーキテクチャを実用にしたものです。最近まで動いていたデジタル交換機、ISDN交換機の制御アーキテクチャの基本は入社十年目くらいの私の個人的なアイデアにすぎなかった訳です。今考えると背筋が寒く

なり、一方で楽しかった若い時代を懐かしんでおります。紙面の都合で省略しますが、実はまだまだ山あり、谷ありの人生です。谷に沈んでいる卒業生の方もおられると思いますが、谷ばかりではありませんよ。

大学の研究では「システムオンチップをネットワークに應用する」と何ができたかを命題にして研究を続けてきました。これはNNT時代からの続きです。思えば約二十年前、おりしも情報処理学会全国大会が衣笠キャンパスで開催されたときのことです。システムオンチップ交換機のアイディアを発表しましたところ、半導体メーカーの偉い技術者から「そんなもの出ると思っているのか」なんて意見を頂きました。システムオンチップなんて言葉はその頃は無かったと思います。日本の半導体産業は日の出の勢いの時代でしたが、今思うと「出来ることしかやらない産業だったのだな」なんて、日本の半導体産業の現状を考えると、思いが巡ってきます。

現在の研究の柱の一つは「インターネットバイパス網」という潮流の研究です。インターネットは今後も続くとして、全てをインターネット化するのではなく、インターネット向きでないトラフィックはコネクショントラフィックという研究を進めております。これも提案したとき、「インターネットで統一しよう」としているときに、なぜそんな研究が必要なのですか」なんて意見を企業研究者から頂きました。しかし、最近始まった総務省の新一代ネットワークの研究では、コネクショントラフィック・コネクショントラフィックの二つの柱になってきているようです。もう一つの研究の柱が「マイク

ロセル統一網」という、これも我流の研究です。道路沿いに百、五百mのセルを連続的に並べ、高速で移動する移動体にもマルチメディア通信を提供しようというもので、無線資源制約の問題から移動体マルチメディア通信を本格的に実現するには、マイクロセルが必須です。しかし、現在のところ、このような研究は他では行われていないようです。WIMAXは高速移動、高速転送をサポートしていると言っていますが、多数の端末の収容は困難です。日本では、この研究を認める人はいませんが、国際的にはDense micro-cellular networkとして評価され始めております。ITUが大学との連携を視野に入れ、国際会議を今年の五月にジュネーブで開催しましたが、この会議に論文が採用されました。上記のように「世界がまだやっていない研究」を心がけて来ましたが、積極的に論文発表を行い、日本では研究発表を行えなかった県は青森県と群馬県のみ、世界ではほぼ四十カ国を訪問することができました。いろいろと見聞を広めることが出来たのも、立命館大学に拾って頂いたおかげと感謝しております。

ただ一つ気がかりがあります。NNTの絶頂期に在職し、退職後には下り坂を転げ落ちるNNTを見てきました。立命館大学でも拡大に次ぎ拡大と、良い時代に在職させて頂きました。しかし、逆に私の在職期間が実は立命館の絶頂期だったということにならないか、というのが懸念です。これからの大学関係者には、そうならないようにどうかよろしく御願い致します。ますますの発展を祈念いたします。

学生時代の回顧

小出剛士

立命館大学大学院 博士後期課程三回生

私が立命館大学の光工学科（現電子情報工学科）に入学したのは十年前、当時十代だった私も二十代最後の年を迎えることとなりました。一九九八年の四月に始まり、学部生の四年間、博士前期課程の二年間を経て、二〇〇四年四月から就職した私は、二〇〇六年四月から、博士課程後期課程に在籍し、現在では社会人と学生の二足の草鞋を履かせていただいております。この十年で得てきた経験は、今日の私を形成する上で、かけがえの無い財産です。この度、幸運にも与えて頂いた本原稿の執筆機会は、次の十年を歩む前に、自分自身の行動を振り返る良いきっかけになると考え、お話をさせて頂く事に致しました。

研究室の先輩方、友人たち、後輩たちとの出会いです。

学生時代に得た最初の大きな出会いは、光工学科の学友や所属していたテニスサークルの友人たちとの出会いでした。彼らとは学内で接するだけでなく、お互いの家を行き来し、机を並べて勉強したり、朝まで語り合ったり、共に鍋をつついたりと、いわゆる同じ釜の飯を食べるような間柄でした。一人暮らしをしていた自分にとって、共に長い時間を過ごした彼らは、友人を越えた家族に近い存在であったと思います。当時の仲間とは、今でも年に何度か連絡を取り合っています。「久しぶり、元気か？」という短いメールでも、もらうだけで不思議と元気が出てきます。高校生の頃、大学では一生付き合える友人に出会えるという話を聞いたことがあるのですが、まさしくその通りになりました。

二つ目の出会いは、電子システム系の諸先生方との出会いです。とりわけ濱川圭弘先生、高倉秀行先生、沼居貴陽先生からは、自分の将来を大きく変える好機や、研究活動を通じた数多くの御指導を頂いております。先生方と出会っ

たことで一番大きく変化したのは、私が進んだ仕事の分野です。現在は私は社会人として、車載用電子部品に関する仕事に携わっており、仕事の内容はいわゆるモノづくりなのですが、今の自分の姿は、十年前からでは到底想像ができません。一九九八年四月、大学に入学した当時の私は、情報工学や光情報工学に関する勉強をしたいと考えており、将来従事したいと考えていたのは、システムエンジニアのようなソフトウェア関係の仕事でした。また、大学院に進んでより深い研究をしたいという考えもありませんでした。今考えると、入学した当時は大学と大学院の違いも良くわかっていなかったと思います。そんな私が、現在の研究テーマである半導体の分野に興味を抱き、後にモノづくりの仕事に携わりたいと考えるようになったのは、学部の二回生時に、高倉先生の講義を受講したことがきっかけでした。講義を受けた当時の段階では、半導体が、目に見えない微細な領域で精密に制御されてつくられていることを知り、「すごい、おもしろい」といった印象をもった程度でしたが、このとき生まれた気持ち私の将来を変える分岐点となったことは間違いありません。その後、濱川先生を始め、諸先生方の講義を受講する過程で半導体への興味が深まっていった私は、自分も新しい技術を生み出す技術者となり、いつかは世の中

を変えようというモノを創り出す仕事がしたいと考えるようになりました。そして、各研究室の研究テーマを比較し、熟考を重ねた結果、濱川先生、高倉先生の共同研究室にて御指導頂くことにいたしました。濱川先生、高倉先生に加えて、博士前期課程二回生の時には、当時の私の先輩が研究グループのゼミ指導をお願いしたことが縁で、沼居先生から御指導を頂く機会を賜りました。また、沼居先生には、社会人になった後にも博士課程後期課程で学ぶ機会を与えていただきました。現在、私は会社と大学という二つの環境で技術者としての研鑽を積んでおります。会社で行う生産技術や開発などの業務と、大学で携わる研究は、それぞれ異なる視点が必要されます。双方の視点を同時に養い、経験を重ねることができる今の環境は、自分の技術者としての視野を広げる、すばらしい機会だと実感しております。私を今の環境へと導いて下さった先生方との出会いは、自分の人生にとって大きなターニングポイントであったと思います。

三つ目の出会いは、研究室の先輩方、友人たち、後輩たちとの出会いです。研究室に所属したばかりの頃、右も左もわからない四回生だった私は、先輩方から装置のメンテナンスの方法にはじまり研究に対する姿勢など、今日の土台となる多くのことを学びました。怒られることも多々有りましたが、

今思えば一つ一つの叱咤激励が、私を成長させる肥料になっていたのだと思います。また、熱心に研究に励む同回生の友人たちや後輩たちの姿勢は、研究が停滞し、気持ち折れそうになっている自分を鼓舞する大きな糧となりました。学部時代に知り合った友人たちが、家族に近い存在であったのに対し、お互いが目標に向かって研鑽し合うという時間を共有できた研究室の学友は、自分にとっていわば戦友のような存在だと思います。研究室の先輩方、友人、後輩との出会いがなければ道半ばで挫折し、今日の自分はなかったかもしれせん。

この十年を振り返っただけでも、自分が本当にたくさんの人達に支えられてきたことが実感できます。お世話になった方々のご好意を無駄にしないためにも、今後も着実に精進を重ねていきたいと考えております。

最後になりましたが、このような表現の機会を頂きましてありがとうございます。また、学びの機会を与えてくださいました、濱川圭弘先生、高倉秀行先生、沼居貴陽先生をはじめ、御指導、御支援頂いた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には、今後の自分の活躍をもって感謝の意を表していきます。

二〇〇七(平成十九)年度 電子システム系卒業生進学・就職状況

表Iに進路状況を示します。同表から院への進学率は四四%で例年よりも就職決定率は好調なことがわかります。今年も超売手市場の下で内定時期が早まることも、夏休み前の内定率が昨年より一〇%弱増加しました。院生を含めた三学科(電電、電光、デザイン)の就職決定率(%)は、五月三十日、七月二十六日現在でそれぞれ(三〇、三三、三六)、(七七、七三、八〇)、(七八、七六、八一)、(九〇、九五、九〇)のように推移しました。参考までに昨年同時期の就職決定率の推移は(二一、二七、一)、(六一、六八、一)、(七、七六、一)、(八六、九四、一)でした。

全国的な求人倍率は二・一四倍(昨年一・八九倍)ですが、千人以上の大企業では〇・七七倍、以下の中小企業では四・二二倍というところで、見方によっては厳しい状況に変わりありません。この結果、多くの内定を取る学生がいる一方で苦戦する学生も多く、学生の二極化現象が顕著です。例年表IIに就職先を示します。例年通り約三分の二弱が電気・電子・機械関連の製造業で、情報・システム、自動車、電力・ガス、運輸・通信関連企業がそれに続いています。応募形態は、「学推」と「学推自由併用」が昨年比べ一〇%増、「自由」のみが二〇%減で、企業が採用数確保をめざしていることが伺えます。しかし、「数は増やすが質は落とさない」方針が徹底しており、面接を重ね、コミュニケーション

ケース能力、行動力、熱意などに着目して、学生の潜在力を見極めようとしています。このため、若手社員との面談を設け、社風や仕事内容を丁寧に伝達するにも、離職率の軽減を図っているようにです。学生にとっても、先輩に会って直接話しを聞く機会が多いようです。ご存知のように立命館大学では従来からキャリアオフィス、就職委員、指導教員による支援活動を行ってきましたが、最近ではCA(キャリアアドバイザー)などOB/OGによるリクルートチームの活動が盛んで、進路決定率の上のほかに優良企業、公務員、教員の実績向上を図っています。今後とも、より一層のご支援、ご指導をお願い致します。(就職委員 浮田宏生)

I. 卒業生・進学者・就職者一覧

2008年1月21日現在

Table with 5 columns: 卒業生, 進学者, 就職者, 活動中, その他. Rows include various faculties like 大学院(電気電子工学科) and a total row.

II. 就職先一覧

(大学院・修了生の就職先も含む)(順不同敬称略)

Table with 2 columns: 業種, 企業名. Rows include 電気・電子機械, 電力・ガス, 自動車, 鉄鋼, 運輸・通信, 印刷, 情報・システム, and その他.

● 同窓会だより ●

五十年目の

同期会に寄せて

松井新三

時の流れは速いものです。昭和三十二年に卒業して早くも五十年半世紀が過ぎてしまいました。この間、世の中にも、大学にもそして私たちにもいろんなことがありました。

昭和三十二年といえますと朝鮮動乱後の鍋底景気が荒れ狂い世の中は不安定で就職もままならない状況でありました。電気工学科を卒業してもまともな職はなく、たとえ就職できたとしても給料は遅配・欠配を覚悟しなければならぬ時代でもありました。

私たちの同期会は「三十二電友会」と銘打って当初は五年毎に開催しておりましたが、七回目からは二、三年毎に短縮し、十回の還暦同期会からは毎年開催して今回で二十一回目を迎えることになりました。

今回はまた、卒業五十年目にあたることから、振り出しに戻して京都で開催し、今までオプショナルとして付けていた団体行動を自由行動に変更したため出席者から大変喜ばれました。

総会・懇親会は十月十八日

(木)に京都の八瀬遊園地の跡地に新しく開設されたエクシブ八瀬龍宮で開催しました。出席者は前田先生にご臨席いただき、毎回のことながら札幌から中宮さん、東京から松田さん夫妻、名古屋から内藤さん、広島から大森さん、それに小船さん夫妻を含めて総勢二十六名で、懇親会では前田先生から祝辞と激励をいただき、会場は大いに盛り上げられました。最後に皆さんから寄せられた近況報告を参照にして、お互いの連絡をとり、次回のを再会を約し散会しました。



井上和夫研究室同窓会

東山の紅葉が一段とさえ、いつもと変わらぬ清き鴨川の流れ、師走とは言えまだまだ秋の気配が残る二〇〇七年十二月一日(土)、三条大橋のもとにある「がんこ寿司三条店」で井上和夫研究室の恒例の同窓会が開催されました。この同窓会は二年に一度、思い出の地・京都で三十年程前より開催されており、卒業生にとっては親友あるいは悪友と会える楽しみの一つになっています。開催の幹事役にはこの研究室の卒業生でもある現在立命館大学に奉職されておられる荒木先生、近年は亀井先生に骨を折って頂いてまいりました。

さて当日は、近畿圏はもとより関東・北陸・四国・九州から駆けつけた総勢四十六名が井上先生御夫妻をお迎えし、亀井先生の司会で進行しました。卒業以来四十年ぶりに参加したという一九六八年卒の渡辺 武さんの乾杯の音頭で会は始まり、井上先生から現在立命館大学に週二科目の授業で出講されていることや、吹田市の合唱団に所属され年末にはベートーベンの第九を合唱される事、家庭菜園をやっておられること等の近況報告がありました。公私ともに益々お忙しくお元気に活躍されておら

れるように感じました。

この後、記念撮影をし、鍋を囲み、賑やかに談笑し会は盛り上がりまして行きました。二時間という限られた時間、まだまだ話は尽きなかったのですが二年後の再会を約し散会となりました。帰りには当日の記念写真が手際よくプリントされ参加者に手渡されました。(一九六九年院卒 北田 隆三)



昭和四十六年卒 電気工学科同窓会

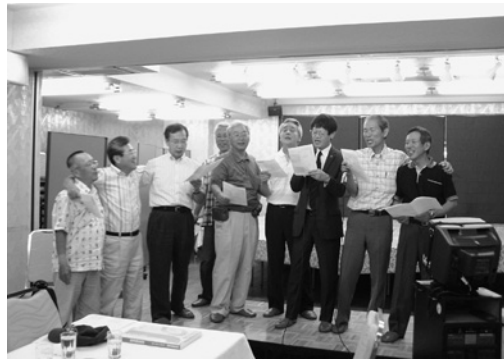
近年、毎年開催している昭和四十六年電気工学科卒業の親睦会、電四六（でんしろう）の会も今年でも第五回目となり、本年（二〇〇七年度）は九月九日（土）に会を持つこととなりました。今回も昨年七月にこの会を持った同じ場所、京都駅まえ「さと茂旅館」で宴を開くこととなり、他府県からの参加者も含めて十四名の参加で開催しました。

懇親会開宴に先立ち、今春一月に急逝した朋友 城 益男君のご冥福を祈り黙祷を捧げました。

団塊の世代の我々もいよいよ佳境（円熟期？）に入り、激動の学生時代をともに古都京都で過ごしたなつかしい思い出話や、仕事の話、近況、その他よもやま話に時のたつのも忘れるほどでした。

引き続き行われた二次会も同旅館で持つこととなり、ここでも大変盛り上がり、その中で、次回はここ数年続いている京都を離れて開催してはどうか、という意見も多数でしたので、次回はその予定での計画を練ることも考えに入れる事となりました。時のたつのも忘れるほどの盛り上がりでした。

終宴を惜しみつつ最後に、我が



立命館大学のますますの発展と我々の健康を願いつつ、寮歌、校歌を歌って幕を閉じました。本当に楽しいひとときでした。幹事の皆様に感謝し、近々の再会を願いつつ……

(中村谷周佑)

辻村・前田研、浦山研 合同同窓会のご案内

辻村・前田研究室と浦山研究室との合同同窓会は一年半ごとに総会を開催しています。今年は六月が開催時期に該当しますが、六月二十一日に立命電友会の総会が予定されています。同窓生の中には電友会の方も出席したいとお考えの方もおられるでしょう。

そこで、遠方からお越しいただく方々の便宜を図るためにも、今回は電友会総会の日程に合わせて、時間帯をずらせる形で私たちの合同同窓会を開催したいと思います。前回は平成十八年十二月に四十名の参加で大いに盛り上がりましたが、師走の忙しい時期に出席できなかった人もおられるのではないのでしょうか。前田先生は今年七十五歳を迎えられ、立命館の規定により非常勤の勤めも解任となられます。本当に長い間ご苦勞様でした。前田先生の慰労会も兼ねて盛大にやりましょう。

電友会の会場はJR京都駅のホテルグランヴィアと聞いておりますが、その近辺で開くことになると思います。スケジュールが決まり次第、改めて案内状を発送させていただきます。

幹事会 会長 藤井 力広

学系便り

平成二十年度
電子システム系の主な役職者

電気電子工学科

学科長 杉本 末雄

就職委員 北澤 敏秀

電子情報工学科

学科長 笠原 健一

就職委員 森本 朗裕

電子情報デザイン学科

学科長 小倉 武

就職委員 寺井 秀一

【異動】

山田 喬彦 教授

平成二十年三月三十一日、定年退職

【新任】

服藤 憲司

平成二十年四月一日、電気電子工学科教授に着任。

福永 洋平

平成二十年四月一日、電子情報デザイン学科助教に着任。

計報

卒年	氏名	平成
昭和16年	湊 秀夫	平成19年1月29日
昭和23年	八田 肇	平成19年9月16日
昭和31年	前川 吉之	平成19年1月20日
昭和36年	吉村 正士	

事務局便り

立命電友会会報三十一号の発行にあたり、お忙しい中の原稿依頼にもかかわらず御快諾戴き、執筆いただきました皆様には心より感謝申し上げます。今年は、第5回定例総会が六月二十一日（土）ホテルグランヴィア京都にて開催されます。皆様の御参加をお待ちしております。

立命電友会では卒業生の名簿管理をしています。会報と一緒に同封しております住所変更の葉書にてたくさんの方から御連絡を戴き大変嬉しく思っております。おかげさまで先不明で戻ってくる郵便が減ってきているのは皆様の御協力のおかげだと思っております。これからも宜しく願います。

立命電友会連絡先
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部電子システム系内
立命電友会事務局 川畑 良尚
宮林(月・木)
電話 〇七七(五六)二六六二
FAX 〇七七(五六)二六六三
E-mail: denyuukai@ml.ritsumei.ac.jp
http://www.ritsumei.ac.jp/se/rj/denyukai/
(会報の題字は久保之俊氏)